

蛇ぶち

おおつぼ なが で よしだがわ
大坪から流れ出た吉田川が、城山(城の端)の山すそを回つて、西へ流れを変える所は、水が岩床を削り二段の滝になって碎け落ち、深いふちをつくっていて、底が見えないほど青い水をたたえています。

むかし だいじや す
ここは、昔から大蛇が住んでいるというので、蛇ぶちと呼ばれていました。

はなし
九十五歳になるおばあさんの話によると、子どものとき、おお おお (へび) が城山から降りて来て、蛇ぶちで水を呑んでいるのを見た人がいたそうです。

いま つうこうと
また、今は通行止めになっている昭和十四年以前の木の橋の下に、頑丈な石の橋桁が残っていますが、昔、その橋から、牛がふちに落ちて死んだり、人が誤って落ちて死んだことなどがあり、里人はあそこを歩く時は気をつけねばならぬと怖がつたそう



です。

ある日、院内へ帰る人が蛇ぶちの上を通りかかると、太いホースのようなものが道に横たわっていました。よく見ると黒い大きな蛇で、どちらが頭か尾かわからないほど長いので、びっくりして逃げ帰ったそうです。

今では、香川用水がそれぞれの池に取り入れられて、農家は水に困らなくなりましたが、昔は、夏に晴れた日が続いて日照りになると、水田の稲、畑の野菜やさとうきび、芋などの作物は水がなくて枯れかかりました。

そこで、農家の人たちは、蛇ぶちの岸にはねつるべを立てて、水をくんでは田や畑に水を注いでやりました。蛇ぶちの水は、農家の人たちがかわるがわる休まないでいくらくみ上げても無くならないので、稲や野菜は枯れなかったそうです。

蛇ぶちの水が、いくらくみ続けてもなくならなかったのは、ふちの奥にだれも見
たことのない大蛇がいて、農家の人たちのために、いつもきれいな水を口から吐き出し続けていたからだといわれています。

